

## 第十章 天 災

### 一、地 震、津 浪

土佐には昔から、次ぎの様な大地震があつた。先づこれを概観してから、上ノ加江の被害状況を見ることとしよう。

#### 一、白鳳の大地震

白鳳十三年十月十四日（一二五〇年昔）

田畑五十万傾（現在の一千百四十七町歩）が海中に没したといわれる。

翌月十一月三日には、大津浪がおこる。

#### 二、慶長の大地震

慶長九年十二月十六日（三五〇年昔）

佐喜浜村だけで三八〇六人の死者があつたといわれる。

#### 三、寛文の大地震

寛文元年十一月十九日（二九三年昔）

## 四、宝永の大地震

宝永四年十月四日（二五〇年昔）

## 五、安政の大地震

安政元年十一月四日（二〇〇年昔）午前九時頃、五日午後五時頃

## 六、昭和南海の大地震

昭和二十一年十二月二十一日、午前四時十五分

以上のように、土佐は白鳳の昔から大地震や津浪に見舞われ、其の被害も甚大であるが、わが上ノ加江の災害については、宝永の地震までは資料がなく不明である。

## (1) 宝永の地震

谷陵記、によると、「宝永四年十月四日未の刻大地震、国中（土佐）死人二千人

上ノ加江亡所汐ハ山迄

矢井賀亡所汐ハ山迄

小矢井賀汐入りけれ共事なし。」

と書かれている。これによれば即ち、上ノ加江、矢井賀は共に津浪のためすつかり流されてしまつて山際まで亡んでしまつたことがわかる。上ノ加江で、禪源寺や弘野神社も流失の災を蒙つたのは

この時である。

其の他くわしい資料はないが、谷陵記の「亡所汐は山迄」の一語で一切が押し流された惨状が読みとられるであろう。

## (2) 安政の地震

## ● 上ノ加江の状況

安政元年十一月四日、午前九時頃、大地震があり、川筋にあぶき汐が指し入る程度であつた。翌五日は青天日和で三月頃の陽気であつた。人々は皆安心していた所、夕方五時頃にわかにも崩れるほどの大地震が起つて、家ゆり動き、道をいく人もころぶ程で、土煙立ちこめて、人々はあわてふためき、泣きさげぶ者もあるほどであつた。やがて、ゆり止んだと思つてみると、しばらくして大津浪が襲来し、前後十二回も押し寄せたが、三番汐、四番汐と次第に引き汐が強くと、浦分の民家は全部流失した。人々は夜の深まるにつれ、一そう恐れをなし、ただ神仏に祈つてひたすら夜の明けを待つた。両栄川をさか上つた汐は、あたり一面にひろがり、汐先は和田ノ川開まで押寄せ、浦分の流失物は、そのあたりや越の谷山際に多くかかつていたということである。

又大川内の原千代重氏が、祖父兼作翁より聞かされたという話によると、当日は丁度、山本屋敷（現在建石のあたり）で角力をしていて、土俵の上の角力取りが取り組んだまころんだ。又あ

たりの麦畑は畝がくずれて平地になつてしまつた。大汐が和田ノ関まで押しよせたが、来る時は、だぶ／＼とやつてきて、歩いてにげられる位だつたが、引き汐はものすごく早かつた。中山が汐に取り囲まれ孤立の状態であつた。と。

●矢井賀の状況

岡田牛太郎老人（九十歳）が、その父から話し聞かされた事の口述によると、大地震の当日、父（半次）は祖父と共に、田仕事に出ていたが、にわかに大地震が起り、山鳴動し、各所に大山崩れがおこりその土煙り物すごく村中がくらがつた。急ぎ家に帰ろうとしたが動揺が激しくて、なかなか歩きにくくて、僅か二、三町はなれた田から家まで帰るのに、ずいぶん時間がかかつたという。帰つてみると、祖母は家の中で、茶釜をそのふたでたたきながら、「カアカア、カアカア」と大声で叫んでいる、（昔から地震よけのまじないといわれる）「早よう出てこんか」と叱りとばしておいて、馬駄屋へ行つた。既に馬小屋は傾き木戸は動かない、柄鎌で棧木を切つて馬をひき出した。

津波のくるのを恐れて一同山の方へ避難した。地震は其の後、何回も起り、家に帰るのも心配で、三日の間山ごもりして、食料や衣類など時々家に取りに帰つたということである。

又津浪の被害も仲々大きかつた。村中が津浪で洗われた。松尾神社（かみ）の上の方へ小船が三艘流されてきて坐つた。

海岸に大きな榎が生えていたが、当時市艇（いさね）で上方へ通つていた戸田久四郎（戸田虎松氏祖父）は、港に碇泊していたが、大津浪に乗つて、この梢を流され、三回もこの榎の梢を往つたり来たり流されて最後に田所の東の畑地に坐つた。

「この時ほど、こわかつた事はない」

と常に久四郎は語つていたということである。

(3) 南海地震

昭和二十一年十二月二十一日午前四時十五分、突如大激震が起り、人家の倒壊おびただしく、又津浪の被害も頗る大きかつた。

県下の被害状況

死亡者	六七九人
負傷者	一、八三六
倒壊家屋	五、四一八
半壊家屋	九、九〇六
流失家屋	五六六
焼失家屋	一九六
浸水家屋	七、〇一三
漁船被害(流失破損)	二、三八九

耕地被害 三、九九五町  
罹災者 九三、二五九人

高岡郡内では、宇佐、須崎、多ノ郷などの被害が最も大きかつたが、本町の被害も亦相当に大きなものであつた。

突如起つた激震は、水平、上下動同時に大地をゆさぶり、家屋をゆりこわし、地面の所々に亀裂を作つた。

戸外に飛び出しうろたへ騒いでいる人々の耳に「津浪が来るぞー」と叫ぶ声が、更に恐怖をたたきつけた。

沖合がにわかにくれ上つたと思ふと、今まで高く見えていた築港の燈台が、水におしつづまれて、其の先の方が僅かに残されている。これと反対に、海岸近くから次第に砂浜が露出して沖の方二百米までも干上つてしまつた。と見るまに盛り上つた海汐は秒速五米位の速さで陸の方へどつと押しよせてくる。人々は取るものも取りあえず、中山に或は、学校に、又善賢寺方面へと避難をはじめ。呼び合う声、叫び声、入り乱れて無気味な光景を呈した。

高汐は、浦分を一呑みにするかと思われたが、海岸堤にさえぎられて幾分氣勢はくじかれ、堤を越して浦分にあふれ込んだ。

ここでさえぎられた高汐は、南北二波に分かれて、南の一波は網代埋立地附近から上陸して、船、倉庫などかつさらつて甘枝の山すそにはねかえり、なお西の奥深く入り込んで忠魂墓地の山際にくだけた。

又北の一波は、両栄川口から浸入して、上ノ加江橋附近より堤防を打ち越し或は之を破壊して、浦分、町の裏からあふれ込み、或は汐満の田畑に氾濫して山際にはねかえり、尙余勢おとろえず川をさかのぼつて神の谷坂出橋ノ堰まで押しよせた。

こうして高汐は前後三回襲来し、岡岩の前の護岸堤は遂に二、三十米破壊せられた。

海岸堤防を打ち越し、水門をくぐり、更に南と北から押しよせた高汐のため、浦分町筋ともに殆ど全戸浸水し、土地の高い役場附近に於て約一尺五寸、低い浦分方面では乳に達する所もあつたといふ。

網代方面では、弘野神社、御旅所から南、全田畑家屋浸水、大式組合倉庫附近の漁具倉庫などは西方三、四百米の田畑に流失、港に碇泊していた機帆船は忠魂墓地近くの水田の所まで流され、小船、家財、木材など一面に散乱し全く手のつけようのない光景であつた。

浦分北地区は中央標示（農業会前）約二十米迄に浸水し、海岸地区に於ては中道以東全戸浸水した。地震に家はこわされ、その上、疊はもとより寝具衣類まで海水にひたされ、住むに家なく着る

に衣なく食うに食なき浦人達の惨状は実に痛々しいものであった。

## 災害調

負傷者 七人(死者なし)

浸水戸数 八〇〇

浸水耕地 麦畑 四〇町

野菜畑 三五町

船舶破損 運搬船 一

漁船 八〇

## (4) かくれた美談

この南海地震に際して、数々の感激美談がある。これらは、或はかくれた美談で世人に多く知られず、或は災害の混乱にまぎ込まれて忘れられているものもある。ここにこれらの美談を再び思い起こして感謝の意を表したい。

## (1) 徹宵の警戒

海岸堤防は、高浪に対して上ノ加江浦分の海の護りとして重大な役を持つものであるが、十分安心の出来る程堅牢なものではない。今回の地震に際しても、人々は津浪の襲来に不安を感じないわ

けにはいかなかった。

いづどこから破壊されるかわからない。

上ノ加江警戒団員は直ちに警戒の部署についた。幸にして持ちこたえるかと思えたこの堤は、遂に中央の一角、二、三十米が破かいされた。暗夜に狂う津浪を前に応急の処置に団員は身を挺した。青年団も之に協力して奮闘した。こうして徹宵の警戒をつづけ、遂に堤を守り抜くことが出来たのである。

混乱の中に自家の被害を顧りみず、一身を危険にさらして、堤を護り、町民を守つた警戒団員並に青年団員の、このぎせいの精神と、奮闘の功は、深く町民から感謝せられると共に、永く称えられるであろう。

## (2) むし立てのいも

津浪の難を避けて、衣笠山には沢山の人々が集まり、闇夜に不安な気持で寒さにふるえながら、夜明けを待つていた。

この時、「そまつなものです、どうぞ、おあがり下さい」と、親切にいたわりながら、ほかほか温かい蒸し立ての甘藷をくばつてまわる二、三人連れがあつた。

「有難うございます」と、受けとりながらも、やみ夜に包まれて、それが何人であるか、顔も見分

けがつかない。又恐怖に戦く人々の心には、それが誰であるかを確かめようとする心のゆとりを取りもどしてはいなかった。

次第に東の白らむと共に、人々の不安の気持も、ようやく落ちつきかけた時、先刻の甘藷の事を思い出したが、そのおくり主を誰れも知る者がなかった。数日して、それが越尾之馬氏とその家族の方々であつたことがわかつた。人々は今更らのように越氏一家の情に感激した。

越氏一家のこの行為は、師走の寒夜に、ほかほかと温かい甘藷のそのように、まことに心あたたまる美談というべきである。

(3) 炊き出し

恐怖の一夜は明けた。しかし地震に家はこわされ、津浪に洗われて、食うに食もない罹災者たちは、もう今から食うことに当惑した。町当局は直ちに炊き出し救助の道を講じた。この時、率先之に協力したのは、山内、大川内の女子青年団であつた。

一同炊き出しに奉仕し、気の毒な罹災者に配つた。

一瞬にして、路頭に投げ出された人々は、この温かい情に蘇り、再起への元気をふるい起たせたのである。

(4) 炭をくばる

地震に家は壊され、津浪に洗われて、浦人達は衣食住に困窮した。殊に寒い時分であり暖をとるにも、又煮炊きするにも燃料のない事も不自由な一つであつた。

これを知つた坂出梅太郎氏は、自家用の木炭十数俵を車に積み、夜分ひそかに配給してまわり、親切を施した。しかも自分の名の出ることを好まず夜分に人知れずまわつたのである。これまたやみの夜にかくれた奇篤の行為であり、寒夜の火桶に燃えさかる炭火と共に氏のあつい情は、いつまでも郷土の人々の心に温かく生きることであらう。

(5) 釘のおくりもの

郷里の惨状を知つた堀部虎猪氏、本越浅海氏は、直ちに家屋修理用の釘を町に送り届けられ罹災民の家屋修理を援けられた。

終戦後、日浅く物資乏しく、殊に釘などの金物類は地震後の事として絶対入手不可能といわれた当時、大量に之を寄贈せられたことは、罹災者にとつてはまことに神の恵みと、感謝せられたことであらう。

郷土を思う両氏の誠情は、一直線に郷土に結ばれ、間髪を容れず危急を救われたのである。その郷土愛と親心に対して、洵に感銘深いものを感じるのである。

笹場、押岡の被害の状態

津浪が海岸近くの田畑に一部浸水した程度で、被害僅少。  
矢井賀方面

倒壊家はなかつたが、半潰のもの若干あり、屋根瓦は殆どの家が多少にかかわらずゆり落され、中には一枚も残りなく落されたのも二、三軒ある。

津浪は人家を浸水する程の事もなく、川に添うて押し入り、松尾神社のすつと下手あたりで引き返した。

二、火 災

(1) 孫之丞焼

天明八年(百七十年昔)浦分全焼した火災を孫之丞焼と云われている。孫之丞の家から出火したものであろう。

当時浦分庄屋をしていた大谷氏が罹災民に補米をして急場を救い、藩から褒賞せられたという記録がある。

(2) 新六焼

弘化元年には(百十年昔)新六焼という火災があつて、これ亦浦分が全焼している。  
新六方の煎茶から火を發したと書かれてある。

(3) 辰の焼

明治十三年(七十年前)の火災には、九番小路から北が全焼している。  
記録によると以上の三つの大火があるが、浦分全焼という災を見ている。これは、まだ瓦のない時代で、萱葺きばかりであつた事がこの惨状を招いたのであろう。而かも浦分はこの漁村でも密集しているので、またたく間に四方にひろがり全焼させたものであろう。